第一部　東アジアの経済発展と人命軽視、災害に対する生死学の対応

災害を受け止める伝承知
――インドネシアの事例から

木村敏明

はじめに

インドネシア共和国を構成する島々の多くはユーラシアプレートとオーストラリアプレートの境界線に沿うような形で広がっており、世界でも有数の地震・火山活動地帯である。しかし、一九四八年に独立を果たしてから二〇世紀が終わるまでの数十年の間はそれらの活動が比較的沈静化しており、九〇年代私がスマトラで調査をしていたころにはインドネシアでは大きな地震は起きないのだと言って当時阪神淡路大震災を経験した地震国日本に同情する人がいるほどであった。

しかしそのような地震に対する楽観的な見方は二一世紀にはいると一変した。二〇〇四年一二月二六日に発生したスマトラ島沖を震源にしたM九・一の大地震で二二万もの生命が奪われたのを皮切りに、今日に至るまでスマトラ島からジャワ島にかけていくつもの中規模、大規模の地震が数年間隔で断続的に発生し続けている

のである。

インドネシアでこれらの災害を受け入れるにあたって宗教が重要な役割を果たしてきたことはこれまでも数々の論者によって指摘されてきた。[1] とりわけ同国人口の八割を超える人々が信仰しているイスラームの教えは苦難と衝撃の中にある人々が事態を理解するためのフレームワークとして重要な役割を果たしたといえるだろう。例えば論者は、スマトラ島パダンで二〇〇九年一〇月に発生した地震直後に人々がインターネット上の新聞に寄せたコメントを分析し、そこで多くの人々が「神（アッラー）」に言及していること、また災害を神からの「試練」と理解し、被災者がそれに耐えられる「忍耐」を神から与えられることを願うものが多数を占めていることなどを指摘した。[2]

もちろんインドネシアでは近代的な学校教育が行われており、自然災害に関する科学的知識も多くの人々はもっている。しかし忘れてはならないのは、「宗教国家」インドネシアにおいて宗教もまた学校における必修科目として小学校から大学までカリキュラムに組み入れられているということである。二〇一〇年に筆者らのチームが北スマトラ大学の学生を対象として行ったアンケートの結果によれば、「なぜ地震が起こるのか？」という問いに対して一四八名のうち六五名がプレートの移動等によって起こる自然現象だと答え、八二名が何らかの神の警告であると答えている。

しかし本稿では、これらの宗教や近代科学とは違った、地域の人々に根ざし、それを導いてきた伝承知と災害の関りについての事例を取り上げてみたい。インドネシアの中でもジャワ島は、クリフォード・ギアツが「ジャワの宗教」と呼んだように、[3] 地域の多くの人々が信者となっているイスラームの教えに還元できない信念や実践が今日なお人々の日々の暮らしの中で大きな力をもっている。これらの信念や実践は体系的なものであるというより、それぞれの地域の自然や歴史、政治構造などと深く結びついた柔軟な性格をもったものであ

る。本稿では、ジャワ島における自然災害に対する伝承知的解釈の一事例を取り上げながら、地域における宗教間の壁や権力構造との関連においてその柔軟な性格を確認してみたい。

ジョグジャカルタとムラピ山

本稿で取り上げるのは、インドネシアのジャワ島中部、ジョグジャカルタ特別州で二〇一〇年に発生したムラピ山噴火災害の事例である。ムラピ山はジョグジャカルタの市街地から北方およそ三〇㎞に位置する活火山で、その美しい姿から町のシンボルとして親しまれている。一方、現地語で「火を噴く」を意味するその名前通り、数年に一度の小噴火と数十年に一度の大規模な噴火のサイクルを今なお繰り返している活火山でもある。市街地から比較的近いこともあって山麓一帯は古くから人々が暮らし、村落が点在しており、噴火のたびに火砕流や降灰などによって人的、物的被害がでている。

ムラピ山の麓にあるジョグジャカルタは一六世紀のマタラム朝以来の古都として知られ、ボロブドゥールやプランバナン遺跡への窓口として人気の観光地でもある。町の中央にある王宮に暮らすスルタンは、その数百年にわたる歴史の中で、常にこの町と周辺地域の政治的、精神的支柱となってきた。インドネシアが近代国家として独立を果たし、ほとんどの州が選挙によって選ばれた州知事によって統治されている現在でもなお、ジョグジャカルタ特別州は世襲のスルタンが州知事を務めることが例外的に認められている。インドネシア政府はしばしばこのスルタンによる支配の廃止を目指して介入を試みたが、いずれも地元の根強い反対によって断念しており、現在もスルタン・ハメンクブウォノ一〇世が州知事を務めている。

王宮と海と山

一七世紀にマタラム朝で作られた歴史書『ジャワ年代記 Babad Tanah Jawi』の中に、初代王セノパティと海の女神をめぐる、地元では知らない者のない神話が記されている。セノパティはジョグジャカルタの南方に位置するパラントリティス海岸から海の女神ロロ・キドゥルが暮らす海中の宮殿を訪問し、三日三晩女神と寝台を共にしながら為政者としての心得を学んだとされる。別の伝承ではこのとき与えられた卵からムラピ山の守護霊が生まれたともされる。この関係は歴代スルタンに引き継がれ、現在でもスルタンはこの海の女神や山の守護霊と特別な関係をもっていると信じられ、彼らに供物を捧げるラブハン儀礼は王宮のもっとも重要な行事のひとつとみなされている。[4] このような海や山と霊的に結びついたスルタンの神話的・宇宙論的地位に関する信念は、ジョグジャカルタの多くの人々によって長い間支持されてきた。それはジョグジャカルタの人々のほとんどが公認宗教のどれかの信者となり、スルタン自身もムスリムであることを時に強くアピールしている今日でも変わりはない。

そのスルタンの命を受けてムラピ山を霊的に管理しているのが「鍵守（Juru Kunci）」と呼ばれる役職である。鍵守は普段からムラピ山の山頂に近いキネハルジョ村に暮らし、山に関わる様々な儀礼を行いながら山の安全を守るとされる。ムラピ山におけるラブハン儀礼も、この鍵守が中心となって執行される。とりわけ前鍵守のバ・マルジャン（Mbah Mardjan）は強い霊力をもつことで知られ、テレビコマーシャルにも出演するなど全国的有名人であった。

二〇一〇年大噴火

ムラピ山の活動は一九九〇年代から活発化する傾向を見せ、一九九四年には中規模の噴火が発生、六〇名の住民が犠牲となった。二〇〇六年五月二七日には小規模噴火の後、ジョグジャカルタの近郊でマグニチュード六・三の直下型地震が発生、大規模な建造物の倒壊などによって三〇〇〇名以上の命が奪われている。このような災害の頻発を受けてインドネシア政府はムラピ山の観測態勢を強化し、来るべき次の噴火に備えていた。

二〇一〇年一〇月二五日、火山活動の予兆を捉えた観測結果に基づき、インドネシア政府はレベル四の警報を出し、火山周辺の住民に避難命令を発令した。だがそのような中、先述の「鍵守」バ・マルジャンはその命令に反対、避難を拒否し、一部の住民がそれに従った。しかし政府の懸念通り、当日の夜から噴火活動が始まり、翌日の爆発的噴火と火砕流により、「鍵守」を含む二九名が死亡する事態となった。その後も噴火活動は断続的に続き、後片付けなどで一時帰宅した住民を巻き込んで一一月二三日までの間に三三二名の命が奪われたのである。

しかしこのことをもって「鍵守」を非難したり、彼のもつ神秘的力を疑ったりする声が大勢を占めた様子は見られない。彼の死の二日後、インドネシアを代表する新聞『コンパス』は「追想バ・マルジャン――バ・マルジャンにとってのムラピの意味」という追悼記事を掲載しているが、そこでは彼が決して他人に避難の拒否を薦めておらず、村に残った人々は自己判断でそうしていたこと、また彼が「良いときにも悪いときにも、これが私の家です」と語り運命をムラピ山にゆだねていたことが好意的に紹介されている。[5]

亡くなった「鍵守」の墓は、彼が暮らしていたキネハルジョ村の墓地に近づけなかったことから、スルナン

村とカリトゥンガ村の共同墓地に建てられたが、そこには今でもたくさんの人々が墓参に訪れている。墓守へのインタヴューによれば、[6] 彼の神秘的な力に与かり商売繁盛など現世利益の願い事をかなえようと墓地を訪れる者も多いという。墓地の中には地方政府によって「イスラームの教えに従った墓参を」という警告文の看板が立てられており、それは逆に言えばそのようでない墓参が多く行われている証しでもある。また現在、ムラピ山一帯では噴火被害跡地をめぐる災害ツーリズムが盛んであるが、「鍵守」はそのシンボル的な存在としてあちらこちらに肖像が掲げられ、また彼が亡くなった自宅跡も観光の対象となっている。しばらく空席となった「鍵守」の地位については、数名の後継者が取りざたされたものの、結局前「鍵守」の息子のバ・アシが任じられている。

スピリチュアルな現象としての噴火

「鍵守」や彼を任じた王宮に対する人々の信頼の背後には、ムラピ山の噴火が、単なる自然現象を越えた王宮・女神・守護霊の関わる霊的な現象であるという人々の確信がある。ムラピ山の災害観光の出発地点に立ち並ぶ土産物店では、噴煙の中に老人や守護霊（？）の姿が写りこんだ一種の心霊写真のようなものが販売されていた。一目で何らかの加工が施されたものであることが分かるが、噴火のもつスピリチュアルな次元を現代的な技術で表現したものだと見ることもできる。鍵守が噴火を予見できなかったとか、それに対して無力であったと述べる人はほとんどおらず、彼は人間にできる最大限の努力をしたと考える人が多い。彼が最後まで残ってムラピ山に祈りを捧げたからあの程度の噴火で済んだという意見を述べる者もいた。彼が自分の家族を逃がして自分だけ火口近くの村に残ったのはその覚悟の現れだというのである。

また、噴火がもたらしてくれた「恵み」に目を向けた語りも非常によく聞かれる。もちろん噴火はたくさんの命や家を奪い、悲しみを人々にもたらした。しかし、それは長い目で見れば必ずしも私たちに損失だけをもたらしたのではなく、様々な利益をもたらしてくれたのだ、というのである。このライプニッツの最善説「ありえる内で最良の世界」を思わせる語りは、インドネシアの他の地域でもしばしば耳にするものである。ジョグジャカルタでその利益としてしばしば取り上げられるのが、噴火被災地をめぐる災害ツーリズムと、火山から噴出された砂や石の採掘産業である。特に後者はセメントの原料や建築・装飾の材料として一大産業に成長し、この地の経済に大きな恩恵をもたらしている。ムラピ山がもたらしてくれたこれらの恵みに目を向けると、王宮・鍵守・守護霊の神話は、噴火によって揺らぐよりむしろ信ずるに値するものとして受けとめられていくのである。[7]

宗教、科学、神話

これらの神話に対して批判的な見解を表明するイスラームやキリスト教の指導者はもちろん存在している。それらは異教的「ジャワ宗教 kejawen」であって正統なイスラームやキリスト教の教えに外れたものであり、また六公認宗教のみを認めているインドネシアの政策にも反していると彼らは主張する。

一方、ジョグジャカルタで活動する宗教指導者の中には、地域の人々に共有された価値観としてこれらの神話を擁護する者も少なくない。二〇一〇年の噴火の後、ジョグジャカルタではイスラーム、プロテスタント、カトリック、ヒンドゥー、仏教などの宗教が協力して被災者支援活動を展開した。その活動の中心的人物であるムハイミン師（イスラーム）およびロベルトゥス神父（カトリック）へのインタヴューにおいて、なぜジョ

グジャカルタで宗教間協力が可能であったのか尋ねてみた。[8] すると彼らはそろって、私たちジョグジャカルタの住民にとってムラピ山をめぐる問題は、個別の宗教を越えたスピリチュアルな意味をもっているという点をあげた。この問題に関しては、普段は重要である宗教間の違いという問題が前景化してこないし、そうするべきではないというのである。

科学的知識であってもその例外ではない。国家災害対策局が二〇一〇年の噴火後ムラピ山麓に立てた看板は、そのような感覚を反映したものだといえる。そこには「危険、このあたり火砕流頻発地帯」という警告文にあわせて、「ムラピ山からの伝言」という一文が付されている。「私は（人間を）打ち負かそうとしてはいないが、打ち負かされもしない。どうか許してほしい、私がたまたま溶岩や火砕流をはきだしたとき、あなたがたがそこをたまたま通り、それにたまたまぶつかったとしたら。」ここで人格化されたムラピ山は、人間の智慧や力を超えた存在であることを明らかにしながら、一方で人間にその許しをこう温かい存在としても描かれている。

ムラピ山と対話する芸術家

さて、これまで見てきた山と王宮をめぐる神話的な伝承知は、ある意味でジョグジャカルタの王宮を中心とした宇宙論的な権威のもとに、鍵守を介して周辺の海や山の力を組み入れていく性格をもったものであるといえる。その破綻とも見える大災害も、これまで見てきたように再びこの宇宙論的権威構造の中に回収されていく傾向をもつ。しかし、一方で私が注目したいのは、伝承知とそれを基盤にした想像力は、必ずしもこのような既存の権威構造に添った形で発揮されるだけではないということである。伝承知の中からは、むしろそれらに「まつろわざる」、批判的な表現や運動が立ち上がることもある。その例として、ジョグジャカルタで活動

を続ける一人のシャマニスティックな芸術家の事例を取り上げてみよう。アグス〝ムラピ〟スティノとして知られる彼は、一九八七年にスラカルタ国立大学を卒業した後、芸術科の教員としてジョグジャカルタの中学校で働いていたが、[9]一九九四年のムラピ山噴火に際して不思議な体験をする。火山灰が降り注ぎあたりが真っ暗で足元もほとんど見えない中を彼は職場から家族の待つ自宅へと急いで帰った。その途中で彼は「真っ暗で終わりのない怪物の町」に迷い込んだ気分になると同時に、噴火への恐怖が言いようの無い幸福感へと変わっていった。[10]この体験を通して、彼のムラピ山やその噴火に対するイメージは変化した。

その経験以来、彼自身ムラピ山により一層夢中になっていった。ムラピ噴火の危険性への恐ろしいイメージは消えた。実際にはムラピは人間に優しかったからである。毎日その体を痛めつけられているにもかかわらず、ムラピは怒っていなかった。ムラピはいつも砂や石といった（冷たい）溶岩形成物を送ってくれる。[11]

その後、彼は独自のやり方で山の守護霊と日常的に交信をするようになった。彼によれば、その後一〇年ほどかけ、山に関わる絵を描く許しを守護霊から得たという。[12]

彼は自らの信仰について、イスラームの特にスーフィズムであると述べている。一方、彼はまた自分は聖典を通してではなく、ムラピ山を通して神を信仰しており、その意味で私の宗教はムラピであるとも言っている。彼のことを背教的だと非難するムスリムもおり、実際、そのような人が家に押しかけてきたこともあった。しかし彼の考えでは、ムスリムを自認している人の多くは、口ではそう言いつつ本当に神の存在を確信しておらず、そのような人に比べれば自分の方がスピリチュアルであるという。[13]

二〇〇四年ころからアグスは絵画を供物として山に捧げるという独特の芸術活動によって周囲に知られ始める。その独特の絵の描き方については『ゴング』誌の記事が要領よくまとめているのでそれを引用したい。

何よりも他の画家と違うのは、絵の描き方である。お香、バラの花、キャンバス、油絵の具が製作のために欠かせない道具である。彼にとって、キャンバスに姿を現す絵画はすべて、超自然界 Alam Gaib と自己との対話のプロセスに他ならない。インスピレーションを得てそれをキャンバスに注ぎ込み、絵画の形が現れるまでの間、トランス状態の中で行われる。絵画の制作はお香の煙の中で、バラの花をかみながらなされる。

絵を描く前に彼は必ず儀礼から始める。アグスによれば、儀礼の中で供物を欲しがる幻影 bayang-bayang が見えるという。儀礼が終わると、その幻影を絵の具と筆でキャンバスの中へと描き込む。「私のこの供物は、西洋文化すなわちキャンバス、絵の具、筆と、ジャワの文化すなわち供物の融合である。香をたき、バラの花とシリーを食べるようなすべての儀礼のやり方から、ワヤンの登場人物の姿までジャワの文化である。[14]

絵が完成すると、再び儀礼を行ってその絵を供物として山に捧げなければならない。その期間は三〇〜四〇日間で、その間絵画は売ったり移動したりすることが出来ないという。[15]

特に彼を有名にしたのは、ムラピ山の火山活動が活発化する傾向を見せていた二〇〇六年の四月二三日にマガラン県のクリンジン村にあるムラピ山の監視所で行われた儀礼である。ムラピ山の怒りを鎮めるため、いつものように儀礼を行った後に、山が噴火した絵を描き、ムラピ山に捧げた。全国紙『コンパス』の記事によれ

ばアグスはこの儀礼について「そのムラピの噴火は、このキャンバスの上で起これば十分だ。このような災害がムラピ周辺の社会を破壊するまでになってはいけない」と述べている。[16] この活動は数々のメディアに取り上げられ、話題を呼んだ。

抗議する神話

二〇〇四年にアグスが山の守護霊との交信をもとに描いた絵がある。赤く火を吹くムラピ山の火口から、火砕流の支配神、キヤイ・ペトルッ Kyai Petruk と溶岩流の支配神、キヤイ・サブジャガッ Kyai Sabuk Jagak が姿を見せている。アグスによれば、これらは山を守る四柱の守護霊のうちの二柱で、山の怒りの側面を表現しているという。[17] 手前には振り上げられた重機のアームが、鋭く端のとがったバケットを今にも地面に振り下ろそうとする姿が描かれている。

アグスによれば、この絵画はムラピ山周辺における土砂の採掘による自然破壊に対する山の警告を表現している。二〇〇〇年代にはいって、それまで細々と地元の人々によって行われていた山の土砂採掘に外部の資本が参入するようになり、重機などが持ち込まれて大規模化していく傾向を見せた。そのような中で、ムラピ山の自然破壊への懸念も高まった。既にムラピ山の守護霊との交信を始めていたアグスは、この絵を描いたのち、それを掲げて賛同者たちと共に県庁前でデモを行った。彼らの活動は功を奏し、重機による土砂採取は州政府によって禁止され、現在では手作業の採掘のみが認められているという。[18]

二〇一〇年の大噴火についても、アグスはムラピ山の守護霊との対話から独自の解釈を行っている。二〇一三年に行った筆者による聞き取り調査の中では、あの大噴火は実は海の女神とムラピ山の結婚を祝う

「祝宴」であるという見解が語られた。

あれは大きな祝宴だった。ロロ・キドゥルとムラピの結婚式である。噴火による死者はその祝宴の準備をするため選ばれた人々だ。選ばれてしまったら逃げられない。牛が死んだのも、林が焼けたのも、祝宴で使うためである。[19]

また、このような見解とは矛盾しているが、二〇一〇年の大噴火を通して、ジョグジャカルタにおいて支配的な宇宙論的な権威構造に対し、それを批判しようとする語りも見られた。例えば現スルタンのハメンクブウォノ一〇世についてアグスは次のように評価する。

前のスルタン、ハメンクブウォノ九世は霊の世界に入れたのでジョグジャカルタは安全であった。一〇世は単なるシンボルにすぎず、神秘的な意味はない。[20]

現スルタンについては、確かにイスラームの教えを重んじる余り、ジャワの伝統を軽んじているという批判をしばしば耳にする。アグスはそのような世間の評価をふまえ、ジョグジャカルタを霊的に守る力のないシンボルにすぎないと批判しているのである。また、「鍵守」についても、

（自分の儀礼の）最大の目的はムラピに仕えること。他の事をしていると、バ・マルジャンのように聞いてもらえなくなる。今の鍵守はただのシンボル。神秘的には認められていない。[21]

などと語っていた。火砕流で亡くなった前の鍵守バ・マルジャンはたいへんな有名人で、精力剤ドリンクのTV広告に出演するなどメディアへの露出も多かった。「他の事」というのは、このような活動を指しているのであろう。また、現鍵守であるバ・アシに対しても辛らつな批評を行っている。このようにアグスによれば、二〇一〇年の噴火は、ジョグジャカルタをめぐる宇宙論的な構造の要に当たる部分が弱体化し、揺らいでいること示している現象なのである。

おわりに

二〇一〇年のムラピ山噴火においては、王宮によって任命されムラピ山を霊的に守る「鍵守」が避難しなかったことにより被害が拡大した。しかし、このことによってジョグジャカルタの住民たちの間で王宮を中心とした宇宙論的・神話的秩序に対する信頼が大きく揺らぎはしなかった。鍵守や王宮は人々の信頼を集め続けているし、自然災害は恵みももたらしたのだという語りさえ頻繁に聞かれる。

「科学」や「宗教」のような外来の知識体系も、地域の人々に受け入れられるためには、伝承知に対する一定の配慮が必要である。国家災害対策局の看板は非常によくそれを表していたし、また宗教間協力の事例は宇宙論的・神話的秩序に対する人々の信頼が宗教の枠をも超えた活動の基盤となりうることを示している。

ここまで見るとムラピ山をめぐる神話の世界は原則的にジョグジャカルタの王家を中心とした地域的な権威構造と強く結びつき、それを正当化するものであるかにも見える。しかしアグス氏の芸術活動はそのような権威構造が神話を完全に占有することも不可能であることを示している。アグス氏の活動は、間違いなくこれらの神話に土台をおきつつも、そこに刺激された想像力は、むしろ地域的な権威構造に立ち向かう方向で発揮さ

れているように見える。すなわち、ムラピ山の霊性を扱った独自の芸術作品や儀礼を通し、彼は自然破壊やそれを容認しているかに見える現スルタンや鍵守に対する批判を展開しているのである。インドネシアにおける災害と宗教の問題を考える際には、公認宗教のみならず、このような多様で柔軟な信仰の世界にも目を向けていくことが重要なのである。

■付記

本稿は東京大学死生学・応用倫理センターと翰林大学生死学研究所が二〇一六年三月一二日に共同で開催した国際学術会議「アジアの発展の矛盾と生死学の模索」で発表した原稿を元に加筆修正したものである。

■註

1　インドネシアにおける宗教の重要性について理解するためには、同国の社会制度を視野に入れる必要がある。第二次世界大戦後、独立へむけて歩み始めたインドネシアでは、新国家を、イスラーム法を国法としたイスラーム国家とするか否かで国論を二分する議論が巻き起こった。国民のマジョリティがムスリムであることを勘案してイスラームを基盤とした国家とすべきという見解があった一方で、それなりの数がいるキリスト教、仏教、ヒンドゥーなどの信者へ配慮すべきという声も少なくなかった。両陣営のきわどいせめぎあいの中で、結局スカルノをはじめとした当時の指導者たちが選んだのが、世俗国家でもイスラーム国家でもない第三の道、すなわちイスラームのみに限定しない「宗教＝唯一神への信仰（Ketuhanan yang Maha Esa）」を土台とした「宗教国家」の道であった。

この「宗教国家インドネシア」という理想は、国是としての「建国五原則 Panca Sila」に盛り込まれたため、社会制度設計においても無視することのできない原理原則となっている。行政には宗教省と宗教大臣が設置されて六つの公認宗教の援助と監督を行う。全国民が携帯を義務付けられている住民登録カード（KTP）にはこれら六宗教のひと

つを選んで記入すべしとされ、事実上これらの宗教のひとつのメンバーとなることが義務付けられている。

2 木村敏明 , 2010,「地震と神の啓示――西スマトラ地震の事例より」、『東北宗教学』vol.5、一九～三六頁。

3 Clifford Geertz, 1960, The Religion of Java, Chicago University Press.

4 木村敏明 , 2013, ロロ・キドゥル、松村一男・平藤喜久子・山田仁史（編）『神の文化史事典』、五八四～五八五頁。

5 Kompas.com <http://regional.kompas.com/read/2010/10/28/08340068/Arti.Merapi.Bagi.Mbah.Maridjan>（二〇一三年八月一三日閲覧）

6 二〇一三年九月二日、スルナン村住民マルコ氏へのインタヴューによる。

7 二〇一三年九月二日、現「鍵守」バ・アシへのインタヴューにおいてもこのような災害がもたらす恩恵が強調されていた。

8 二〇一三年九月三日に行われたK・H・アブドゥル・ムハイミン氏およびロベルトゥス・トゥリ司祭へのインタヴューによる。

9 Amat Sukandar, 2011, Berdialog dengan Penghuni Merapi Lewat Karya Seni, VICTORY vol.30, p.23.

10 K. Ardi & Tafsiyah, 2004, Pelukis Ritual Alam Merap, GONG No.54, p.17.

11 K. Ardi & Tafsiyah, 前掲箇所 .

12 二〇一三年九月三日、アグス・スティノ氏へのインタヴューによる。

13 同上

14 K. Ardi & Tafsiyah, 2004, Pelukis Ritual Alam Merap, GONG No.54, p.16.

15 二〇一三年九月三日、アグス・スティノ氏へのインタヴューによる。

16 Madina Nusrat, 2013, Biarlah Letusan Dashyat Itu Terjadi Di Atas Kanvas, Kompas 2013. 4. 26 版 .

17 ムラピ山の守護霊についてアグスは次のように説明をしている。キヤイ・ペトルッは強力な破壊力をもち熱い雲（火砕流）と噴火を統御する。キヤイ・サプジャガッは火口から流れる砂や石の乗り手、支配者としてその周辺地域を混乱に陥れることができる。ニャイ・ガドゥン・ムラティ Nyai Gadhung Mlati は女性の人格をもった霊的守護者であ

る。彼女は豊穣の女神だと信じられている。火山灰が広がることで周辺地域の土地が豊かになるからである。一方、ニャイ・クンディッ Nyai Kendhit は雨の女神と信じられ、ムラピの土地に雨を降らせそこを豊かな農地とする。さらに、今日までムラピ周辺に「隠されている」サトリア・ピニンギッ Satria Piningit という守護者もいる。このサトリア・ピニンギッは人間の我欲を破壊する力をもっている。Amat Sukandar, 2011, Berdialog dengan Penghuni Merapi Lewat Karya Seni, VICTORY vol.30, p.23 を参照。

18 二〇一三年九月三日、アグス・スティノ氏へのインタヴューによる。

19 同上。

20 同上。

21 同上。

（きむら・としあき　東北大学大学院文学研究科教授）